

突然「来年春に廃校」

市方針に父母反発

取手・野々井中

取手市が、市立野々井中学校を09年度末で廃校にする方針を突然打ち出し、混乱が広がっている。この4月に入学を予定していた子は、わずかに1年で転校を余儀なくされるため、保護者が猛反発。市教委は「拙速だった」と謝罪し、1年延期を提案した。だが、「せめて卒業まで存続を」と訴える父母との対立は解けていない。(高木潔)

市1年延期の譲歩案

問題化したのは先月末。同中に入學予定の小学6年生が、家に持ち帰った1枚の紙が発端だ。学校から手渡されたもので、「小中学校の適正配置基本計画」と書かれていた。人口減や少子化が深刻な取手市は、1学年1クラスといった小規模校が増えた。このため、市教委は審議会を経

野々井中に進学予定だった子の保護者たちは、紙を讀んで驚いた。1カ月前の1月26日に「野々井中入学おめでとう」と書かれた就学通知書を市教委から受け取ったばかり。制服や体操着の注文をすでに済ませていたからだ。

「野々井中の運動会を見たり、在校生の声を聞いたりして準備していたのに、1年後に取手二中に転校しろとは何事だ」などと反発の声が上がった。

事態を複雑にしているのが学区の弾力的運用だ。従来は決められた学区内の公立校に通うことが半ば強制だったが、現在はいじめや家庭の事情、部活動の希望など、市教委が認めれば学区外の学校でも通うことができる。

稲小の場合、野々井中ではなく取手二中(375人・12クラス)特別支援学級を除く)に進む児童が以前から半数を超えていた。野々井中の廃校計画もあり、新年度は大半が二中に進む見込みで、この制度が野々井中の生徒減に拍車をかけた感は否めない。

現在、野々井中入学を希望しているのは永山小学区を含め全部で10人。外堀を埋められていく状況に、保護者たちは「今から二中に行けという市教委の考えが見え見え」などと反発。これまでに市教委と3回話し合いの場を持った。今月14日の会合には藤井信吾市長が初めて参加し、急激に悪化した市の財政事情も統廃合の理由があると初めて認めた。だが保護者側が求める向こう3年間の学校存続は「財政的に厳しい」と突っぱねた。

娘が入学を予定する丸野博子さんは「子どもや保護者に事前の根回しをせず、準備もしていない市教委のやり方は許せない。対抗策を考えたい」と話している。